

小池 宏明 牧師

先週は、「神のかたち」に創られたとは人間は「霊的な存在」として創られたことを確認した。では、霊的な存在である人間とは、どういうことなのだろうか？

### \*神と人とは息の合ったパートナー

7節「神である【主】は、その大地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。」人（アダム）は、神様が土から創られた、土に属する者である。一方で、人は神様に永遠の「いのちの息」を分け与えられた「息の合った」神のパートナーなのである。人は主なる神様のパートナーとしてこの地を治めるべき存在なのだ。主なる神様は、この土の器の中に、神の御霊と言う宝を宿して下さった。墮落後の人間の回復は、主イエス・キリストを心から信じて受け入れて、聖霊なる神様を心の中心に宿すことなのだ。

### \*人の使命

神様は、人に働くことを命じる。これは人のためにも必要なことである。15、16節「神である【主】は人を連れて来て、エデンの園に置き、そこを耕させ、また守らせた。神である【主】は人に命じられた。「あなたは園のどの木からでも思いのまま食べてよい。・・・」

人が、園に置かれた目的は「園を耕して、園を守る」ためだ。神の文化と神の伝統と造り出して、継承して生きる使命が与えられている人間（私たち）なのだ。

もう一つ、神様は人に大切な命令を下した。それは、17節「・・・しかし、善悪の知識の木からは、食べてはならない。その木から食べる時、あなたは必ず死ぬ。」この違反については、はっきりとした刑罰が付いている。これは、神様が人を縛るための命令ではない。園の中にあるどんな木の実であっても、自由に食べて良いのだ。ただ中央にある一本だけ、手出しをするな、と言うのである。これは、この世界の支配者が自分たち人間ではなくて、主なる神様なのだ、神様の任命を受けて、神様の代理人としての自覚を促している。

### \*ふさわしい助け手

この世界を治めるために働いている人間には、ふさわしい助け手が必要であった。18節「また、神である【主】は言われた。「人がひとりであるのは良くない。わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう。」

「ふさわしい」という言葉は、ヘブル語では、「目の前にいる者のように」と言う意味で、一組の互いに助け合う関係を表わしている。主はその通りにしてくださった。こうして、24節「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」これは、今日でも色あせることなく適応して生きる必要がある真理だ。親からの精神的経済的自立、夫婦の同居、肉体の結合、一夫一妻制、という重要な原則が証しされている。新約時代、パウロは、この奥義を「キリストと教会の関係」に例えた。（エペソ5：32）キリストは夫であり花婿、教会（神の家族、兄弟姉妹）はキリストの妻、キリストの花嫁である。この間には、何人も、何事も割り込んではいない。